

野依良治先生のノーベル化学賞受賞に寄せて

総長 長尾 真

名古屋大学教授の野依良治先生がノーベル化学賞を受賞されることになりました。この授賞の対象となった研究は、先生が京都大学工学部を卒業され、工学部助手をしておられた頃の着想が元になっているとのことで、京都大学にとっても大変喜ばしく、心からお喜び申し上げます。

先生には東京でのいろいろな会議でお会いしていますが、先生の会議での発言は、常に日本の学問研究を正しく進めなければならないというお気持ちから発せられ、特にこれから学問研究をする若い人々に対する期待と情熱にあふれた率直な提言は、会議のメンバーを勇気づけて来ました。

こういったことから当然推察されることですが、先生は他人の真似をせず、他人のやっていない研究をすること、自分の人生を賭けようというテーマを発見し、諦めずに徹底的に追究すること、さらに研究をする以上、それがいつかは社会に貢献し、人類の福祉につながってゆくべきであるという信念を堅持してこられました。学生に対しても、その厳しい

教育と研究指導を通じてこのチャレンジ精神を伝え、多くの優れた後輩を育てられています。

自分の人生を賭けることの出来るテーマに巡り会うということは、非常に稀なことであり、また極めて難しいことでもあります。これは後からふり返って初めて言える言葉であり、始めは自分の心の底から引きつけられる魅力を感じ、夢中になる課題に巡り会えるかどうかということでしょう。そのためには自分のやりたい研究を自由にやれる環境が不可欠であります。京都大学は学生諸君の学習においても、また研究者の研究においても、自分が没頭してやりたいことが出来るという環境をもっていますが、今後ともこの環境を大切に、世界に誇ることで出来る研究成果を出してゆきたいものです。

京都大学の我々、教官も学生も、野依先生のノーベル賞ご受賞をお祝いするだけでなく、先生の学問・研究に対するこのチャレンジ精神をあらためて認識し、また学びとり、学問研究に一層の努力をしてゆこうではありませんか。

弟子はノーベル化学賞，だがその先生は

名誉教授 野崎 一

一昨日、京大広報の部会長から突然電話があり、京大の後輩たちのために、たとえば「ノーベル賞を取る秘訣」というような題で「紋切り型でない」一文を所望された。賞取りの秘訣とは、何だか本の広告で見たような文句だが、私は残念ながら、この種のノウハウ本を勉強したことがないので、上手く書けそうにない。ところが、最近ある人から実にストレートに、上に掲げた標題のような質問を浴びせられたことがあった。このような言葉を聞くと、さすがに私でも、下司の勘繰りめ、燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を...と密かに心で思ってしまうのである。



私は1941年に京大入学、そのままずっと1985年まで京大にご厄介になった。もうすぐ80歳になる。そこで同窓の教員諸氏や学生諸君のためにも、学内報の要望に応じて、私なりの反省と提言を含めた「秘訣」を述べてみたいと思う。この老いの繰り言、ないし言い訳が、後輩諸氏の参考や励みとなるならば、それこそ望外の喜びである。

今年度のノーベル化学賞を受賞する野依良治さんは、1960年に本学工学部工業化学科の4年生に進み、共通の恩師である故穴戸圭一教授の門をくぐった。以来8年の間、毎日顔を合わせていた仲間である。1963年彼が修士課程を終えたとき、私は教授になったので、その「超」貧乏講座の助手になってもらった。モノ・カネはなかったが、活気だけはあった。

1968年の2月には名古屋大学理学部の故平田義正教授に拾われて、教授のいない新設講座の助教授となり、間もなく33歳の若さで名大理学部の教授になった。ちなみに故福井謙一先生も同じ位の歳に教授になっておられる。それに対して私は、8歳も余分に歳を食ってから昇任した。3, 40代での8年の遅れは、正直言って、まさに致命的である。

例の大学紛争のころ、私は教室主任で、大学解体を叫ぶ連中のターゲットにされ、ひたすら時間を空費していた。その間、野依さんはハーヴァード大学の E. J. Corey 教授（1990年ノーベル化学賞、優秀な協力者陣を持つことで著名）のもとへ留学し、後々まで続く大きな人脈を、欧米の地に作り上げた。これは彼の大きな財産の一つである。野依さんは、その後もせっせと彼の地を訪れては、互いに切磋琢磨を重ねてきた。人はみな、歴史と文化を自分の背中に背負って生きているものである。優れた仲間にも真に理解され、評価されたいと思ったら、自分の研究能力を磨くだけでなく、自分の心をも磨いて多くの友人を作れるようにする必要がある。タコツボ暮らしではどんなに優秀だと自負しても、世間から相手にされないのだ。

私は1957年に1年間、ニューヨーク州のコネル大学に留学させてもらった。彼の地でお世話になった J. Meinwald 教授も大先生であるが、ノーベル賞は貰っていない。研究グループも小さかった。それに今思い出すのは、米国東岸や西欧諸国まで、プロペラ機でブルンブルン飛んで行くには、助教授の給料1年分が要った。ところが、1970年代に入ると、ジャンボ・ジェットが登場である。旅費は給料1月分以下になり、所要時間も激減した。私にも欧米出張の機会は増えたが、実は時すでに遅しの感があった。老人は、やはりうっとうしくて、若い人のように、気楽に友達にはなっていけないのである。

私のコネル時代に、いわゆるベーカー・レクチャーラーとして、S. Winstein 教授が来ていた。どこでもやっているのだろうが、他所の大学から前期または後期の間、ずっと臨時赴任してきて、その教員と一緒に討論し、講義に携わるのである。それも集中講義ではなくて、正規授業と同じ週一回のペー



（右から）3人目が野崎先生，2人目が野依先生
（撮影日 64.11.13 場所 野崎研究室）

スで進める。正確には George Fisher Baker Nonresident Lectureship in Chemistry という長ったらしい名前がついている。このレクチャーに招かれると、あとで講義録を John Wiley & Sons から刊行してくれるのが常で、その本が出ればノーベル賞も間近いと言われている。野依さんは1990年に最初の日本人講師として招かれた。そして1994年には “Asymmetric Catalysis In Organic Synthesis” というタイトルの単行本を出している。彼のノーベル賞が毎年10月恒例の話題となったのは、その数年前からのことである。ところが一方の Winstein 教授の方は、気の毒にも、まだ若いうちに心臓病で亡くなってしまった。生きていれば、とっくに賞に手の届くところにいた人であった。だから最後の、そして最大の秘訣は、恐らく健康の保持である。

将来を担う学生諸君に繰り返し言いたいことは、大学で一番大切なのは自分の一生を捧げる対象を1日も早く見つけるということです。生涯の伴侶となる学問を早く探し当て、それに没入すれば、怖いものはないのです。そして、外国での学会には自費で出かけ、ポスター・セッションなどで知友を一人でも多く作り、彼等との交流を通じて自分を磨き、成長させて下さい。友達の範囲は地理的にも広いほどよいのです。世の中にはいろんな人が住んでいるのだから。そして最後に、いや何はともあれ、先ず最初に健康です。（2001年10月15日）

（のざき ひとし 元工学部教授 昭和60年退官，
専門は有機合成化学・有機金属化学）

大学の動き

次期総長候補者に長尾 真現総長を再選

現総長の任期満了（12月15日）に伴う次期総長候補者の選考が、9月28日（金）、29日（土）の両日にわたる投票を経た後、29日開催の臨時評議会において行われ、その結果、長尾 真現総長が再選された。

今回の選挙にあたり、かねてより総長選考の在り方について改善が必要とされ、部局長会議の下に設置された「総長選考の在り方について」のワーキンググループの答申が6月5日開催の評議会で承認された。

これに基づき、7月3日開催の評議会で、「京都大学総長選考基準の一部改正等について」が承認され、今回の選挙から適用されることとなった。

改正概要

- ① 総長選挙実施時期を、就任2カ月前の9月の最終週に行う。
- ② 評議会における投票を第2次投票とし、第1次総長候補者のうちから5名を選ぶこととする。なお、前回までの3名を選出する第2次投票は廃止する。
- ③ 評議会における投票は、第1次投票の開票後実

総長候補者の選考状況

1. 選挙資格者数

第1次投票	第2次投票	第3次投票以降
2,852名	53名	1,811名

2. 被選挙資格者数 917名

3. 第1次投票結果（9月28日（金））

投票者数	投票総数	うち有効投票数	無効投票数
1,570名	3,140票	2,889票	251票

候補者氏名（五十音順）

茨木 俊 秀（大学院情報学研究科）
 尾池 和 夫（理 学 部）
 荻野 文 丸（工 学 部）
 加藤 重 樹（理 学 部）
 木村 雅 昭（法 学 部）
 金田 章 裕（文 学 部）
 佐和 隆 光（経 済 研 究 所）
 田中 紘 一（医学部附属病院）
 土岐 憲 三（工 学 部）
 中西 重 忠（大学院生命科学研究所）
 長尾 真（総 長）
 林 哲 介（総合人間学部）
 本 庶 佑（医 学 部）
 益川 敏 英（基礎物理学研究所）
 松野 隆 一（農 学 部）
 丸山 正 樹（理 学 部）

（注）京都大学総長選考基準第12条第2項ただし書の規定により、候補者は16名になったものである。



臨時評議会終了後、記者会見する長尾総長

施する。

- ④ 評議会における投票方法は、3名連記による。
- ⑤ 評議会における投票時の候補者名簿は、第1次総長候補者15名の部局・氏名を五十音順に記載したものとする。なお、同候補者名簿は公表する。
- ⑥ 第2次総長候補者に関する情報の項目は、事務局において把握している部局、氏名、生年月日、年齢、学位、担当講座等及び略歴とし、五十音順とする。
- ⑦ 第3次投票の総長候補者名簿は、選挙2日目の朝に部局に送付する。

4. 第2次投票結果（9月28日（金）、臨時評議会）

投票者数	投票総数	うち有効投票数	無効投票数
52名	156票	156票	0票

候補者氏名（五十音順）

尾池 和 夫 木村 雅 昭 長尾 真
 本 庶 佑 益川 敏 英

5. 第3次投票結果（9月29日（土））

投票者数	投票総数	うち有効投票数	無効投票数
890名	890票	881票	9票

候補者氏名（得票順）

長尾 真 本 庶 佑

6. 決選投票結果（9月29日（土））

投票者数	投票総数	うち有効投票数	無効投票数
914名	914票	903票	11票

候補者氏名（得票数）

長尾 真（495票） 本 庶 佑（408票）

7. 選 考

臨時評議会は、選挙の結果に基づき、次期総長候補者として長尾 真現総長を選考し、同氏はこれを受諾した。

部局長の交替

人文科学研究所長

栞山正進人文科学研究所長の任期満了に伴い、その後任として阪上 孝教授（文化研究創生研究部門担当）が、11月1日同研究所長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。



博士学位授与式

9月25日(火)午前10時30分から、京大会館において、長尾 真総長、両副学長をはじめ、各研究科長等関係者出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記（7月23日付、9月25日付）が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時40分終了した。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研究科	平成13年7月			平成13年9月		
	課程 博士	論文 博士	計	課程 博士	論文 博士	計
文学研究科		2	2	6	6	12
教育学研究科	1	1	2	1		1
法学研究科	1	2	3			
経済学研究科	3	2	5	2	2	4
理学研究科	14	2	16	5		5
医学研究科	8	3	11	3	4	7
薬学研究科		4	4		8	8
工学研究科	7	7	14	7	7	14
農学研究科	6	9	15	3		3
人間・環境学研究科	1		1	1		1
エネルギー科学研究科	3	1	4	1	2	3
情報学研究科		3	3	2		2
計	44	36	80	31	29	60

部局の動き

医学研究科及び経済研究所に寄附講座（寄附研究部門）を設置

医学研究科の寄附講座「疫学研究情報管理学講座」及び経済研究所の寄附研究部門「応用金融工学（野村証券グループ）研究部門」が7月11日、24日の寄附講座等審査委員会で審議、9月25日評議会において報告・了承され、10月1日に設置されることとなった。

概要は次のとおりである。

医学研究科の寄附講座

「疫学研究情報管理学講座」

- 1 部 局 名 医学研究科
- 2 名 称 疫学研究情報管理学講座
- 3 寄 附 者 武田薬品工業株式会社
コーポレート・オフィサー
医薬品開発本部長
濱中 康彦
- 4 寄 附 金 額 総額200,000,000円(分割納付)
- 5 設 置 期 間 平成13年10月～平成18年9月
(5年間)
- 6 担 当 教 員
教授相当 坂本 純一
助手相当 松岡 淨
助手相当 Rahman Mahbubur
- 7 研究目的
疫学データの登録・管理・解析法の開発研究と大規模臨床試験などの臨床疫学的研究への応用を図り、(臨床)疫学研究の発展に資する。
- 8 研究内容
EBM 共同研究センターと連携して、疫学データのインターネットを介した登録・管理・解析法の開発研究と、実際に臨床各科および社会健康医学系専攻が関わる(臨床)疫学的研究で収集されるデータの登録・管理・解析を支援する。
- 9 研究課題
(1) インターネットを介した効率的な登録・管理・解析法の開発研究

- (2) 疫学データのセキュリティに関する研究
- (3) EBM 共同研究センターで主宰する降圧薬の有効性に関する大規模臨床試験 CASE - J のデータ登録・管理・解析
- (4) 臨床各科および社会健康医学系専攻が関わる(臨床)疫学的研究で収集されるデータの登録・管理・解析

経済研究所の寄附研究部門

「応用金融工学(野村証券グループ)研究部門」

- 1 部 局 名 経済研究所
- 2 名 称 応用金融工学(野村証券グループ)研究部門
- 3 寄 附 者 野村証券株式会社
代表取締役専務 稲野 和利
- 4 寄 附 金 額 総額120,000,000円(分割納付)
- 5 設 置 期 間 平成13年10月～平成16年9月
(3年間)
- 6 担 当 教 員
教授相当 Stanly R.Pliska
助教授相当 加藤 康之
- 7 研究目的
高度な金融工学の研究とその実務への応用を促進する。
- 8 研究内容
事業リスクに関わる市場リスクについて、業種ごとに分析をおこなう。
- 9 研究課題
事業リスクに関わる市場リスクのモデル分析

日誌 2001.9.1～9.30

- | | |
|--------------------------------|-----------------|
| 9月11日 評議会 | 19日 国際交流会館委員会 |
| 13日 総長、イタリア共和国及びスペインを訪問(23日まで) | 25日 評議会 |
| 14日 同和・人権問題委員会 | ” 大学院審議会 |
| 19日 国際交流委員会 | ” 博士学位授与式 |
| | 28日 総長選挙(29日まで) |

訃報

このたび、^{しん かずお}秦 和夫大学院工学研究科助教授、^{かわばたすえ お}川端季雄名誉教授、^{ときおか たかし}時岡 隆名誉教授、^{たかはしきよゆき}高橋清之医療技術短期大学部名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

秦 和夫 大学院工学研究科助教授



秦 和夫先生は、9月9日逝去された。享年51。

先生は、昭和49年京都大学工学部原子核工学科を卒業後、同大学院修士課程を修了された。昭和51年京都大学工学部原子核工学科助手に採用、同62年同助教授に就任され、平成8年改組により大学院工学研究科原子核工学専攻助教授になられた。その間、昭和58年より2年間米国カリフォルニア大学客員研究員を務められた。

先生は、高エネルギー粒子線の物質との相互作用、

電子・光子の物質との相互作用と輸送、放射線の生物効果と防護、加速器の医療応用など放射線の基礎と応用に関する幅広い分野において顕著な研究成果を上げられた。その優れた業績は平成元年と同12年の二度にわたる原子力学会論文賞、さらに同9年の大阪ニュークリアサイエンス賞として高く評価されている。原子力学会企画委員などを務められ、学会の発展にも尽くされた。

また、先生は、工学部および大学院工学研究科において学生の教育・研究指導に情熱を傾け後進の育成に努められた。
(大学院工学研究科)

川端 季雄 名誉教授



川端季雄先生は、9月12日逝去された。享年70。

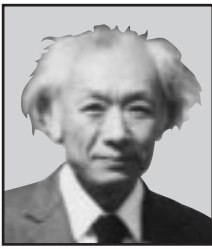
先生は、昭和30年京都工芸繊維大学工芸学部繊維工芸学科を卒業、同35年京都大学大学院工学研究科博士課程を修了後、本学工学部助手、助教授を経て同58年教授に就任、高分子化学科高分子力学講座(平成5年度より工学研究科高分子化学専攻高分子物性講座高分子力学分野)を担任された。平成6年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は平成6年から同13年まで滋賀県立大学工学部教授を務められた。

先生は高分子固体物性、高分子複合材料、繊維工

学・科学の分野で幾多の輝かしい業績を残された。また日本繊維機械学会、日本材料学会、日本レオロジー学会、日本複合材料学会で理事などの要職に就かれた。さらに“ The Journal of the Textile Institute ”等数多くの海外の学術雑誌の編集委員も務められ、世界の高分子科学、繊維工学・科学の発展に貢献をされた。

これらの業績に対して、昭和49年高分子学会より学会賞、同62年 The Textile Institute (イギリス)よりWarner Memorial Medal、平成元年、布の風合いの客観評価システムの開発に関する研究に対してモエヘネシー・ルイヴィトン「芸術のための科学」国際科学賞(フランス)など数多くの賞を受けられた。
(大学院工学研究科)

時岡 隆 名誉教授

時岡 隆先生は、9月30日逝去された。享年87。

先生は、昭和11年京都帝国大学理学部動物学科を卒業、同13年同大学理学部助手、農学部助教授、理学部助教授、理学部附属瀬戸臨海実験所助教授を経て、同48年同実験所教授に就任、同50年から52年まで同所長を務められた。昭和52年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、動物系統分類学の分野で顕著な功績をあげられた。先生の研究は毛顎動物、尾索動物をはじめとして有櫛動物、軟体動物（異足類、翼足類、頭楯類）、節足動物（鰓尾類）など広汎な動物群にわたっており、我が国の動物分類学・海洋生物学の発

展に多大な貢献を果たしたのみならず、世界的にもこれらの分野の学問の進歩に寄与された。

さらに各地の浮遊生物群集や海岸動物相に関する研究や多種多様な海産動物の幼生に関する形態・生態の観察、調査も行い、数多くの研究論文・著書を公表された。主な著書に昭和天皇が相模湾で採集された海鞘類の標本を精細に研究して分類し、各種の形態的特徴や分布等を解説した『相模湾産海鞘類図譜』や『動物系統分類学』（2巻，8巻上，追補版：分担執筆）等がある。

また、在任中から自然保護にも力を注がれ、白浜町沿岸に海域で初の環境保全特別区域指定を受ける運動を進めるなど、社会的活動にも貢献され、昭和44年には和歌山県文化功労賞を授与されている。

（大学院理学研究科）

高橋 清之 医療技術短期大学部名誉教授

高橋清之先生は、9月25日逝去された。享年65。

先生は、昭和36年京都大学医学部医学科を卒業、実地修練後、岐阜県立医科大学助手、岐阜大学医学部助手、京都大学医学部助手、同医学部附属病院助手、同講師を経て、同52年京都大学医療技術短期大学部衛生技術学科助教授、同58年同作業療法学科の教授に就任された。平成11年停年により退官され、京都大学医療技術短期大学部名誉教授の称号を受けられた。この間、平成6年から2年間、京都大学医療技術短期大学部長を

併任された。

先生は、内分泌病理学及び病理検査学の研究において優れた研究業績を残し、その発展に貢献された。橋本病、甲状腺髄様癌、膵臓ランゲルハウス島腫瘍の研究には、病理組織学的・免疫組織化学的・電子顕微鏡的広範な研究方法を駆使し、独自の研究成果をあげ、注目を浴びられた。また、IDDM（インシュリン依存性糖尿病）とNIDDM（インシュリン非依存症糖尿病）を病理学的に検討し、糖尿病の膵ラ氏島病変の相違を明らかにし、高く評価をされた。

（医療技術短期大学部）

随想

無用の用

名誉教授 清水 剛夫



最近、ナノ流行りである。ナノテクノロジーが、それを支援する周辺技術の進展と相俟って、今日の先導的科学研究の一つに算えられるようになった。本学在籍時代の後期にナノテクノロジーの一端を分子工学材料の研究の重心の一つとし、また、国際学術誌“Nanotechnology”の編集に携わっていた者としては、ついに来たか、という気持ちである。

ナノテクノロジーは他の科学技術と異なり、極微の領域の科学技術ということで、各分野に広く横断的である。1ナノメートルは、10億分の1メートルであり、物質の最小単位体である原子や分子のほとんどがこの辺りの大きさである。これらを任意に操作し、またそれによる極微の機能体を具現することがナノテクノロジーが指向するところであろう。例えば、コンピューターのような機能ボックスを考えた場合、単純に大きさだけを比較すると、現在の技術はマイクロメートル（100万分の1メートル）のレベルであるので、長さにして1000分の1、体積にして10億分の1、すなわち容量は10億倍となる。一例であるが、4半世紀の後にはコンピューターによる脳記憶の読み出しが可能になってくると、文部科学省・科学技術政策研究所の予測調査にある。これは、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、ITなど多くの領域の研究が密接に関連し合うことになる。

近年、科学と技術は、科学技術と書かれるように、時に区別が付きにくいほどになっている。ナノテクノロジーは特にその感が強い。そのため、大学の在り方が今まで以上に問われるようになって考えられる。勿論、この領域の研究にも、今までの延長線上

にない、科学の発展に重要な原理的知の発見が期待されることは言うまでもない。それが基礎的であればあるほど裾野が広く、知を増殖し、知の密度を高め、その応用の範囲も広い。一方、研究において効率と経済性は社会性から見て重要である。科学技術の効率発展が国家的総合的戦略的推進体制によって支えられてきたことは、周知のことである。しかし、その原点は個々のあるいは少数の同学の先駆的な研究にある。

今日までに集積された知は膨大である。今後、知で知を作る研究の傾向が強くなっていくと考えられる。さらに、研究の効率を高めるため、合目的という恣意的な要素が加わることは必然である。選択と集中、そして速さである。速さはプライオリティでもある。これらは、産業界においては既に世界的傾向である。この恣意的要素は、知的資産の創出の原点は個人にあり、知は個人に委ねられ自由であるという知の行為の考えに相對する。知の創出に大きく働くセレンディピティも個人のものである。知的資産の創出と継承は、大学、高等教育機関の使命である。知の世界で先導的役割を果たし、また、今後も果たしていくのは、現在、それらをおいて他にないであろう。総合的戦略的研究の重要度は極めて大きい。これを有効に導くのは各分野の研究の確かさであり、基礎研究の深さにあることはいうまでもない。これらの二つを両立させる大学の在り方は、ここ数年来の国立大学や国立研究機関の独立行政法人化の問題に絡んでいる。

有用の用を知れども無用の用を知ることを莫し（莊子）。今、銘ずべきであろう。

（しみず たけお 元工学部教授

平成8年退官、専門は分子工学）

洛書

講義録さまざま

八木 紀一郎

経済学史という領域で研究していると、学者の講義録までが資料になる。第一次大戦後にちょうど大学の拡充期を迎えた日本には、敗戦国のドイツ・オーストリアの文献がさまざまな形で来ているので、そのなかに混じっていることもある。今回は、それについて書くことにする。



ドイツ語圏の学者の講義録に最初に出会ったのは、前任校の岡山大学で、本学にも縁の深い黒正巖さん（京都帝大の農史講座教授、六高の校長を兼任）が残した資料を調べた時だ。黒正さんは1922年から長期の欧州滞在をしているがその時収集した資料の中に、カール・メンガーとベーム＝バヴェルクの石版刷のヴィーン大学での講義録3点があった。これは、本家本元のヴィーン大学の図書館にも、版の違うものを含め4点が保存されていた。なんでも、大きな大学の主要講義については、スクリプテンと呼ばれる講義録の作成・販売が商売として成り立っていたとのことである。日本の大学でも、ちょっと前まで謄写版刷の講義ノートが売買されていたが、そんなものであろう。ドイツ語圏の大学では、履修する講義ごとに結構な額の授業料が徴収されていたから、講義録ですませられれば経済的にも助かる。また、授業に出ても、教師の読み上げる原稿をひたすら書き取るのが普通なのだから、綺麗に書かれた講義録があればその労苦も省けるだろう。

もちろん手書きの講義録もある。一橋大学の社会科学古典資料センターのメンガー文庫にはメンガー自身の講義録は残されていなかったが、弟子にあたるベーム＝バヴェルクの手書き講義録がある。これは、ベームが最初に勤めたインスブルック大学の講義録のようだ。これは世界でただ一つかと思われたが、ベームを研究している京都産業大学の塘 茂樹さんは、細部に差異のあるいま1部の講義録を入手している。

私自身も数年前に、本学の経済学部図書室にあるビュッヒャー文庫で、ドイツ歴史学派のリーダーと

されるカール・クニースの1886年夏学期の講義録を発見した。クニースは19世紀後半のハイデルベルクの経済学教授で、マックス・ヴェーバーもその講義を受講している。歴史学派はふつう理論に敵対的だと解されているので、どんな講義をしていたのかは知っておきたいところだ。またメンガーやベームらのオーストリア学派との関連、クニースがヴェーバーに与えた影響という点からも興味もたれた。それで、関西福祉大学の溝端 剛さんに依頼して解読してもらった。

溝端さんの仕事が完成に近づき、資料解説を書く段になって、この講義録の作成者が気になりはじめた。ハイデルベルク大学の文書館に残っている資料で調べると、クニースの件の講義を聴講したのは62名の学生で、そのなかに講義録の作成者ヴォルフガング・ミッテルマイヤーがいた。また、ビュッヒャーの自伝から、この学生が、夫人の従弟にあたることがわかった。ミッテルマイヤー家は多くの学者や官吏を出していて、ヴォルフガング自身も刑法学者となり、最後はハイデルベルクで教授になっている。筆者の素性がわかってくると、公表の前に遺族にことわりを入れた方がいいと思い始めた。（クニースは19世紀末に亡くなっているが、ヴォルフガングは長命であった。）それで、ドイツの電話帳でハイデルベルク近辺のミッテルマイヤー姓のアドレスを探索した。十数通の照会の手紙を出して待つこと1ヶ月、幸いなことに1通の返事が届いた！

そのようにして、京大にあるクニースの講義録は、ビュッヒャーに縁故のある筆者の遺族の祝福とともに、経済学研究科の欧文紀要に公表された。紀要を送付した海外の研究者たちにも、注目してもらえた。敗戦後の生活苦のなかで蔵書を手放した時、ビュッヒャーは断腸の思いをしたことであろう。私はこの講義録を公表したことで、ビュッヒャーに対してだけでなく、日本の学者が当時の敗戦国の学者仲間にも負っている負債の一部を返すことができたような気持ちになっている。

（やぎ きいちろう 大学院経済学研究科教授）

話題

宇治キャンパス公開2001を開催

10月6日(土)に第5回“宇治キャンパス公開2001”が開催された。今回は、宇治キャンパスの全研究所・センター・宇治地区に研究室を置く各研究科が参加し、日頃の研究活動を一望できる総合展示、「生命とエネルギーのミレニアムサイエンス」をテーマとした講演会、核融合実験装置などの大型機器の公開ラボ、曲げ木加工の公開実験など数多くの催しが行われた。当日は晴天にも恵まれて、450人の参加者があった。

総合展示では、終日、研究者から詳しい説明があり、参加者の好評を得た。講演会の「核融合エネルギーへの挑戦」(エネルギー理工学研究所・大引得弘教授)では、核融合エネルギーの研究の現状と将来展望が解説され、また、「宇治の市民大学」と提携した「癌と戦うケミ・ストーリー」(化学研究所・杉浦幸雄教授)の講演では、癌を退治するための化学レベルでの解明が確実に進んでいる現状が解説された。



なお、一般公開前日には、学内者に対する見学会が行われ、夕刻の懇親会には約350人の参加があった。

宇治地区では、今後もこのような企画を通して21世紀を共に考える知のパートナーシップを進めるため市民との交流を図っていきたいと考えている。

(宇治キャンパス公開2001実行委員会)

お知らせ

第4回情報学シンポジウム

「情報学の未来 - 情報・システム・ネットワークが紡ぐ世界を探る - 」

1. 日 時：12月6日(木)午前10時～午後5時

2. 場 所：人間・環境学研究科 地下大講義室

3. 演題及び講師：

「伝える情報から浸る情報へ グループ・ダイナミックスの視点」 杉万俊夫 [総合人間学部]

「コミュニケーションにおける沈黙の意義について」 清水 博 [金沢工業大学 場の研究所]

パネル討論「情報とシステムが紡ぎ出す世界とは？」

司 会：片井 修 [情報学研究科]

パネリスト：竹村真一 [東北芸術工科大学] [(株)プロジェクト・タオス]

守屋和幸 [情報学研究科]

下原勝憲 [情報学研究科] [(株)国際電気通信基礎技術研究所]

4. 受講料：無料

5. 問い合わせ先：情報学研究科システム科学専攻(寺川) TEL & FAX 753-5042

詳細は情報学シンポジウムのホームページをご覧ください。

<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/Symposium/>

本部構内・総合人間学部構内の工事について

本部構内では時計台記念館改修（関連工事を含む）工事が、また総合人間学部構内では全学共通教育棟建設工事が行われております。

通行等ご不便をお掛けしますが、ご協力をお願いいたします。



時計台記念館完成予想図



全学共通教育棟完成予想図

平成13年11月

平成13年12月



凡 例		樹木移植		大型バイク置場 (工事中)		バリアフリー化 (工事中)
		時計台既存建物調査		生協仮設店舗 (工事中)		共通教育棟 (工事中)
		取り壊し		環境整備 (工事中)		作業用地のため通行出来ません
		改修に伴う解体		新庁舎 (工事中)		総人正門は工事専用のため仮設門からお入り下さい

能楽鑑賞会

課外教養行事の一環として、日本の伝統芸能の能楽鑑賞会を下記のとおり企画しました。本学学生・教職員各位におかれては、是非この機会に狂言と能楽を堪能してください。

来場をお待ちしております。

記

日 時：12月11日（火）

午後6時00分開場

6時30分開演

8時30分終演予定

（開演後の入場はご遠慮願います。）

会 場：京都観世会館

京都市左京区岡崎円勝寺町44 ☎771-6114

（東山仁王門を東へ約300メートル）

演 目：狂 言「樋の酒」 小笠原 匡

山本 豪一 他

能 楽「通小町」 片山 九郎右衛門

片山 清司 他

備 考： 入場無料（入場の際は、学生証または職員証を呈示してください。）

プログラムは、当日会場で配布します。

定員は550人、先着順とします。

問い合わせ先：

学生部学生課課外教養担当 ☎753-2511

編集後記

今月号の掲載記事が決まり、校正作業に入っていた時、《野依名大教授にノーベル化学賞！》というニュースが飛び込んで来た。そこで急遽無理を承知で、野依先生のお人柄をよく知る長尾総長と野崎名誉教授にご寄稿をお願いした。とりわけご高齢（80歳）にもかかわらず快くお引き受け頂き、短時間（2日間）で書いて下さった野崎名誉教授には、「京大の後輩」として心よりお礼申し上げる。

原稿依頼と言うのは、捕手がへろへろ球を投手に返し、さあ来いと身構えるまでの動作に似ている。そのミットに向かって野崎投手は、凄まじい「ストレート」をど真ん中に投げ込んでくれた。この渾身の力を込めた1球の中には、研究者のたぎる魂と痛切な反省のすべてが込められている。自分は弟子の誰にも負けないほど研究に打ち込んで来たんだ、という強烈な誇り、しかし時の利や人の利を得られないでしまった、という痛恨の思い、さりとて天地人の利を得ても、自分の健康管理ができなければ、天下はおろかノーベル賞1つ取れないぞ、という一見平凡に見えるが、命を削って研究する後輩たちへの深い思いやりに満ちた忠告。こういう誇り高く少々荒っぽい研究環境の中からノーベル賞が出るのだ、ということをよく分らせて貰った。当の野依先生にもご寄稿を依頼するつもりでいるが、それはノーベル賞授与式後をお願いすることにしよう。乞うご期待。 （齊藤記）

